平成３０年度

市民福祉常任委員会

行政視察報告書

〇視察期間　　平成３０年７月２日～３日

〇視察先および視察テーマ

- 留萌市　幌糠農業農村支援センター
  『農業と福祉の連携による６次産業化について』
- 札幌市　愛心メモリアル病院
  『病院食に対する取り組みについて』
- 砂川市　砂川市立病院
  『認知症に関する取り組みについて』

〇参加委員　　委 員 長　熊 谷　吉 正
副委員長　大 石　健 二
委　　員　佐々木　　寿
高 橋　伸 典
塩 田　昌 彦

市民福祉常任委員会行政視察について報告いたします。
７月２日に留萌市の「農業と福祉の連携による６次産業化について」、７月３日に札幌市の社会医療法人社団　愛心メモリアル病院の「病院食に対する取り組みについて」、「砂川市における認知症に関する取り組みについて」視察研修を行いましたので主な内容について報告いたします。

■ 留萌市の「農業と福祉の連携による６次産業化について」

留萌市では平成 24 年より農水産物の未利用部分の利用拡大に向けた乾燥加工研究事業に取り組んできた経過があり、平成 25 年に乾燥野菜による高齢農家と障がい者のスモールビジネス支援として、大根を使った「るもい産てぎり干し大根」を試作製造し就労支援の取り組みが開始されました。平成 26 年からは、農業・福祉連携６次産業化支援事業（事業費約 2700 万円）により取り組みを拡大し、野菜生産の振興、障がい者就労等の支援、幌糠地区の活性化などに向け、廃校施設を改修し農産物加工による農福連携の拠点が整備されています。

農福連携により製造されている「てぎり干し大根」

現状は、協力農家のほ場で大根の収穫作業を行い、廃校跡地の加工施設で障がいの程度に応じた作業分担により製品化され、６次産業化の取り組みとして、関東圏のスーパー・道内の生協での販売、学校給食での提供や干し大根入りパンも商品化されています。

今後の新たな取り組みとして、農林水産省の「農山漁村振興交付金」を活用し、障がい者の就労支援を進めるための受け入れ体制の構築、就労サポート人材派遣など、ＮＰＯるもい農業応援隊にコーディネーターを配置し、地域における農福連携に向けた取り組み全体を調整、コーディネートする仕組み作りを目指すとのことでした。

留萌市幌糠農業農村支援センター内の乾燥施設について説明を受ける

他に近畿大学と連携し、もみ殻を利用した固形燃料の開発などにより、資源循環型農業への挑戦が始まるなど、新たな分野における農福連携に繋がる要素もあり、行政職員の情報収集による国の補助制度の連続した有効活用、地域住民と

の連携や支援体制の構築等の努力が実を結んだ結果と思われます。

名寄市における農福連携の取り組みは障がい者と受け入れ農業者等の連携により進みつつありますが、障がい者の雇用を農業分野の労働力確保と捉えるのではなく、障がい者の特性を生かした就労環境の確保に対する理解と、相互の連携を高めていくことが課題であり、具体的課題をクリアしながらの今後の事業化に期待が膨らみます。

■ 札幌市社会医療法人社団　愛心メモリアル病院の「病院食に対する取り組みについて」

愛心メモリアル病院が良質でおいしい病院食の提供に着手したのは、病院食業務を委託していた配食業者との契約満了が契機となりました。業者との契約更新か自前での調理配食かを院内で協議を重ねる中で、入院患者を対象に行ったアンケートから「病院食は味が薄い」「まずい」「食欲がわかない」という病院食に対する率直な意見が院内調理と配食の決め手となりました。

良質な病院食を提供するための工夫について学ぶ：愛心メモリアル病院

病院食改善の阻害要因となっているのが病院食ならではの制約です。塩分の制限とおいしさを両立させるのは一筋縄ではいきません。ほかにもたんぱく質の制限や硬いものが食べられないなど、患者の症状によって食材のさまざまな制限に対応しなければなりません。さらに、費用の壁もあります。病院食は治療の一環とされ、その費用は健康保険と自己負担によって支払われています。病院食は入院時食事療養費で１日３食１，９２０円と決められています。診療報酬上、１食当たり６４０円、その内自己負担は１００～３６０円で供されます。健康保険から費用が出る以上、病院食には療養に必要で良質な食事提供が求められています。

鮮度やおいしさの追求について同院の管理栄養士からは「困難な交渉の末に仲買人さん共に札幌中央卸売市場からの直接買い付けを行いコスト削減を図る事に成功しました」との話しがあり、扱いやすい冷凍ものではなく安価で鮮度の高い生魚や生野菜の提供で費用の壁のみならず食材の制限についても新たな取り組みを試みています。さらに、通常の病院食は、高血圧・心臓病などの塩分制限は５―６グラム未満で調理され、普段の食事より相当、味が薄いと感じられるのはやむを得ません。予算や手間や労力、健康を考えた場合、病院食は、実はおいしいのかも知れません。ただ、考えさせられる事例もあります。入院中に食事が進まず栄養が低下した患者に、制限のない普通食を出していたら元気になったという

事例が報告されています。逆に、病気の進行で食事ができないと判断され点滴や胃に入った胃瘻で強制的な栄養補給が始まると、益々食事ができなくなることも起こり得ることを学びました。

病院食コンテストでも評価の高い
愛心メモリアル病院の病院食

今回の視察では「おいしい病院食」であるためには、病院食を正しく評価する第三者機関の設置とそれを支える行政の仕組みづくりと共に、私たちひとり一人が病院食に強い関心を持つことで、「病院食はまずい、おいしくない」という諦めや固定観念からの脱却につながるということを再認識することができました。

■ 砂川市における「認知症に関する取り組みについて」

砂川市立病院では平成 16 年に「物忘れ外来」の診療が開設され、同年、管内開業医、地域包括支援センターや、社協等と任意団体「中空知地域で認知症を支える会」を立ち上げ、認知症に関する啓発事業を開始しました。その後、平成 24 年に北海道から認知症疾患医療センターの指定を受け、地域医療機関、介護関連事業者との連携による診療治療、啓発活動が高く評価されてきました。その後、平成 26 に開始した「認知症初期集中支援推進事業」にもつながり、「物忘れ外来」から 13 年にもわたり、様々な資源やネットワークを構築し、認知症の方が地域でより安心して暮らし続けられる組織づくりが進められてきています。

認知症予防には地域住民・ボランティア・町内会の支え合いが重要：砂川市立病院

認知症疾患医療センターの主な役割は、医療、連携、啓発です。医療では、診断を行うことと同様に重要なのが、認知症の周辺行動である徘徊や暴言などによりＳＯＳが出されたときの入院対応やそのためのベットの確保です。また、人工透析などの身体合併症や様々な内科的な疾患への診療も必要です。連携、啓発についても様々な機関や市民・住民とも協調しながら、認知症とのかかわり方やビジョンがどこまで進んでいるか、ケアスタッフや地域住民と共に啓発活動を継続しているとの話がありました。

診療体制の特徴としては、精神神経科・脳神経外科・精神内科の３人の医師が

共同診療を行い、様々な視点での診断により精度の高い結果を出していることです。単にうつ病や精神的症状を診るだけでは診療単価が上がらないため、専門医師の配置や高度な医療機器の活用により診療単価にも反映しています。

砂川市の認知症初期集中支援チームについては、平成２６年９月から道内２番目に地域包括支援センターに設置され、医療系訪問担当者と介護職員及び認知症サポート医の３人で動き、究極の「おせっかいチーム」で訪問し早期発見・早期治療・早期介護につなぐことにしています。現在は、砂川市だけではなく空知中部広域連合からも要望があり１市４町に広がり支援体制が確立されました。

認知症家族教室は、年 3 回開催し介護の不安を家族同士で話し合っています。さらには専門医の努力によりアルツハイマー型認知症とは違うレビー小体型認知症についても相談できる体制も整備されています。認知症の支え合いは、専門病院、地域のかかりつけ医や介護・保健・福祉関係者の連携に加え、認知症の方がより長く在宅で生活するためには地域住民やボランティア、町内会などの支えあいが重要とのことで、砂川市だからできるのではなく、どの地域でも一般化するために課題を明確にしたうえで実践することが必要であると痛感しました。

市民福祉常任委員会として、今任期中の視察テーマの多くは、第７期高齢者医療福祉計画・介護保険事業計画の大きな課題でもある「地域包括ケアシステム」と重なるため、今後の実効性をより高めていくために市民や行政とも連携しながら継続的に取り組んで行きたいと思います。

以上で報告と致します。